

水の哲学

森鷗外

「次第にふけてゆくおぼろ夜に、
沈黙の二人を載せた高瀬舟は、
黒い水の^{おもて}面をすべって行った」

文豪として名高い森鷗外（1862-1922）は文久2年、鳥根県津和野町の典医の長男として生まれた。明治14年（1884）に東大医学部を卒業して陸軍に入り、明治17年から21年まで衛生学研究でドイツへ留学する。

帰国後の明治22年（1889）、文芸誌「しがらみ草紙」を創刊。翌年には留学中の体験をモチーフにした雅文体の小説『舞姫』を発表して本格的な文学活動を開始する。離婚後に移り住んだ千駄木の家を「観潮楼」と名づけ、ここで歌会を開いたり、代表作である『雁』、『キタ・セクスアリス』、『阿部一族』、『山椒大夫』、『高瀬舟』などを生み出した。

明治40年（1907）に軍医行政のトップである陸軍軍医総監に就任し、大正5年（1916）に陸軍を退役してからは皇室博物館館長兼図書頭として『渋江抽斎』など史伝・考証の世界で重要な著作を遺した。

高瀬舟での2人の会話

表題の文章は短編『高瀬舟』のラストシーンで江戸時代に京都と大阪を結ぶ運河として使われていた高瀬川を舞台としている。当時、島流しになる京都の罪人は高瀬舟という平底の小さな舟で大阪に送られた。

ある月明かりの夜、護送役を命じられた京都町

奉行所同心の羽田庄兵衛は罪人の様子がいつもと違うことが気になった。通常は「載せていく罪人は、いつもほとんど同じように、目も当てられぬ気の毒な様子をしていた」。ところが「この男はどうしたのだろう。遊山船にでも乗ったような顔をしている」。

不思議に思って庄兵衛は弟殺しの罪で島へ送られる喜助に「お前の様子を見れば、どうも島へ往くのを苦にはしていないようだ。一体、お前は どう思っているのだい」と問いかける。

すると喜助は島流しで悲しむのは「世間で楽をしていた人だからでございます」とこれまでの貧しい暮らしに訣別できることへの素直な喜びの表情を見せる。そして自分に迷惑をかけないように剃刀で自殺を図った重病の弟が苦しみながら死にきれず、頼まれて剃刀を抜いたらそのまま死んでしまったという事件の顛末を語る。喜助は自分の



行為が苦しんでいる弟を楽にしてやったと真底から思っていた。

足ることを知る境地

一般的に『高瀬舟』は安楽死の是非を問いかけた小説と見做されている。この問題に対する鷗外の考えは「従来の道徳は苦しませておくと命じている。しかし医学社会には、死に瀕して苦しむものがあつたら、楽に死なせてその苦しみをすくってやるのがいいとする考え方がある」と安楽死を肯定する立場を示唆している。

もうひとつのポイントは喜助という特異な人物像を通じて鷗外が何を伝えたかったかということだ。喜助は島送りになる自分を後悔することも、卑下することも、悲嘆することもなく「わたくしはこれまでどこといって自分のいてよい所というものがございませでした。この度お上で島にいと仰って下さいます。そのいと仰る所に落ちついていることができますのが、まず何よりも有り難い事でございます」と自分の居場所を見つけたことへの喜びをあらわにする。しかも島送りを言い渡された際に与えられた2百文を懐に「島へ往ってみますまでは、どんな仕事ができるかわかりませんが、わたくしはこの2百文を島でする仕事の元手にしようと楽しんでおります」とまで言う。

これを聞いた庄兵衛は自分と比べて「不思議なのは喜助の欲のないこと、足ることを知っていることである」と感嘆する。庄兵衛の抱いた感慨は鷗外みずからの心情を代弁しているといっている



だろう。

喜助の到達した静謐な達観の境地は沈黙した2人を乗せて月夜の川面を下っていく高瀬舟の姿に象徴されている。

水を象徴として活かす

森林太郎を本名とする鷗外のペンネームの由来については諸説がある。杜甫の『唐詩選』五言律の鷗が舞う雨の情景、あるいは「かめめの渡し」という吾妻橋上流の地名から名づけたという話もある。

いずれにせよ鷗外には水にまつわるエピソードや作品が少なくない。本郷台地の東端にある千駄木の自宅の建て増した2階からは遠く東京湾の品川沖まで見渡せたことから「観潮楼」と命名された。鷗外は明治40年から43年にかけて観潮楼歌会を開催し、与謝野鉄幹、伊藤左千夫、佐々木信綱、斎藤茂吉、上田敏、石川啄木などの錚々たる歌人、詩人、文学者が参加していた。

作品では『雁』のなかに上野の不忍池で投げた石が雁にあたって死んでしまうという全編を象徴するようなシーンがある。安寿と厨子王で有名な『山椒大夫』では船上での母子の別れがドラマティックに描かれる。『高瀬舟』もまた月夜の高瀬川という舞台設定を欠かすことはできない。

鷗外は水を何かしらの象徴的なものとして作品に活かした。陸軍軍医総監時代の部下はそんな鷗外を「淡々水の如き人であった」と回想している。

（高倉克也）